

田島弥平旧宅の動向

和久美緒*

はじめに

田島弥平旧宅が所在するのは群馬県南部伊勢崎市の東南端利根川沿岸の境島村である。境島村は利根川と広瀬川の合流地点にあたり、地区の中央部を利根川が貫流している。田島弥平旧宅は利根川左岸にあり、埼玉県本庄市と近接している。境島村地区は利根川の旧氾濫原にあたり、現在の堤防が大正時代に完成するまで度重なる洪水による川欠けがはげしく、検地が幕末まで続けられた地域である⁽¹⁾。江戸時代には農業生産による収入は不安定であったため、それを補う形で舟運・養蚕・蚕種製造業を行っていた。特に蚕種製造業は利根川の洪水を逆手に取って発展し⁽²⁾、日本の蚕種製造業において福島県伊達市、長野県上田市と並んで3大産地といわれるまでに成長した。

田島弥平旧宅は、幕末から明治にかけて優良な蚕種（蚕の卵）を生産するため空気の流通を重視し、



図1 田島弥平旧宅の屋敷配置図

自然に近い形で蚕を飼育する「清涼育」を体系的に完成させ、規範となる養蚕建物を発案し、近代養蚕飼育法の確立を図った田島弥平の旧宅である。旧宅には、幕末から明治期にかけての蚕種製造業発展を示す建物遺構や歴史的史資料が良好に残されており、日本の近代化を語る上で他に類例がなく、欠くことのできない歴史的資産である。このことから平成24年9月24日に国史跡に指定され、平成25年6月26日には「富岡製糸場と絹蚕業遺産群」の構成資産として世界文化遺産に登録された。

今回は世界文化遺産に登録されてから5年間の整備状況及び調査研究成果をまとめた上で今後の展望について述べていきたい。

1 保存・整備の状況

(1) 整備計画について

田島弥平旧宅は国史跡指定後に『史跡田島弥平旧宅保存管理計画』（平成25年度）、『史跡田島弥平旧宅整備基本計画』（平成27年度）、『史跡田島弥平旧宅全体基本設計』（平成28年度）を定め、整備に向けた基本方針や方法を提示した。

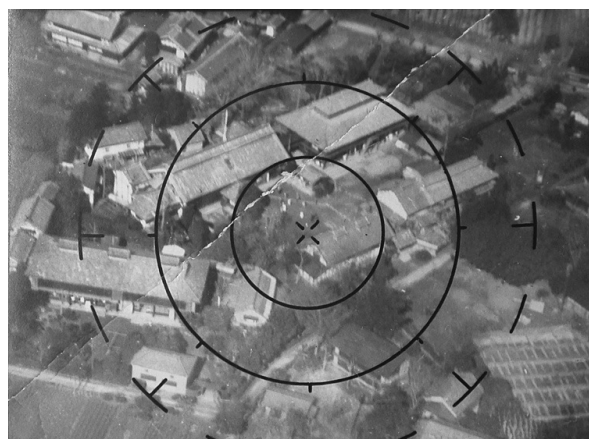


図2 昭和初期の田島弥平旧宅

*わく みお・伊勢崎市教育委員会文化財保護課

整備年代は、文久3年（1863年）に主屋が建てられてから自宅での蚕種製造を停止する昭和15年（1940年）頃までと設定した。図2は、平成28年度の史資料調査で発見された、昭和初期の田島弥平旧宅の空撮写真である⁽³⁾。この写真に写る建物は、大正12年（1924年）島村役場に提出された「建物坪数届」と一致する。また写真手前左に写る田島武平家主屋の隣には昭和12～13年頃に解体されたヒガシクラ⁽⁴⁾が写っている。以上の2点から整備年代に最も近い年代の写真と推定される。

(2) 別荘の修復整備工事について

田島弥平旧宅は現在も所有者が居住しており、所有者の生活に配慮した整備活用を行うため、公開範囲、各種調査、日常管理などは全て所有者と協議の上実施している。修復整備工事は、所有者の生活の場としている主屋は本格的な工事を行わず、必要に応じて修繕を行うにとどめ、傷みの状況に応じて付属屋から順次開始することにした。

まず史跡内では最古の建物と考えられ、建築年代が安政期まで遡る可能性のある別荘の修復整備工事を平成30年度から開始した。別荘は敷地の南東側の香月楼跡基壇に建ち、桁行2.5間、梁間4.5間、木造2階建瓦葺の建物で、屋根には檜が1つ付けられている。後設部分として西面に1.5間幅の下屋、南面には便所がある。建築年代は文久3年（1863）以前と伝えられ、明治5～6年（1872～1873）頃、主屋東側に新蚕室を建築する際、そこに建っていた初代弥兵衛の隠居を撤去しその一部を現位置に移築し、香月楼の西側も撤去して残りの建物と接合させたと考えられている⁽⁵⁾。別荘は2代目弥平の隠居として使用されたと伝わるが、指定時には物置として使用されていた。修理前に内部の所蔵品を移動させたところ、1階は2部屋を家畜小屋として、2階は物置として使用されたことが確認された。家畜がいなくなっからは、2階同様物置となっていた。2階は小屋裏まで使用して建具・養蚕道具・農具が多数保管されていた。

別荘の修復整備工事は整備年代に近い決定的な史料が発見されていないため復原は行わず、古写真を



図3 別荘（修復前）



図4 別荘（修復後）



図5 別荘東面に残る香月楼北側屋根部分の痕跡



図6
大便器と
小便器

もとに、鉄板が張られていた壁の漆喰壁への復旧、傷んだ部材の交換や土壁の塗り替えと瓦の葺き替えなどの半解体修理を行い、それに合わせて耐震性の強化を図った。解体と並行して寸法の実測や破損状況、痕跡調査を行った。痕跡調査のため南北と西壁全面を覆っていた鉄板と東壁を覆っていた下見板をはずしたところ、開口部が西側で3か所、東側で1か所確認された。特に西側3か所の開口部は部材の納まりが悪く、別の建物と接続していた可能性がある。このことから、別荘は当初から現在の場所に単独で建てられたものではなく、別の建物に接続していたものが切り離されて移築されてきた可能性がより高くなった。東面からは、別荘と香月楼の接合部分の痕跡が確認された。(図5) この痕跡により、香月楼の梁間(妻側)方向の断面形状と南北方向の建物の接続した位置が明らかになった。1階の天井の一部には舟板の転用材を使用していることも確認された。

1階南面の便所は、屋根の小屋組や床の納まりから想定すると移築されたと考えられる。便所は東西

方向に2つに分かれ、西側が大便秘器、東側が小便器となっている。便器は角型大便秘器、朝顔型小便器である。染付陶器製で、花鳥図(牡丹に雀)が描かれ、その図柄の特徴から明治時代後期に瀬戸で製作されたものと考えられる。

2 調査・研究の状況

(1) 発掘調査

発掘調査は平成28年度より開始し、今年度で5年目を迎えた。史跡周辺での発掘調査は皆無だったことから、史跡地とその周辺の基本土層を把握した上で、現在も残る歴史的建造物の前身となる建物遺構の有無や地業方法の調査を行っている。(図7)

平成28年度の調査

史跡内と周囲の基本土層の確認、排水施設の確認を中心に調査を行った。

基本土層の調査では、表土から約170cm下で天明3年(1783)の浅間山噴火の際に噴出した浅間石を含む洪水層を検出した。この層の上には約1m洪水

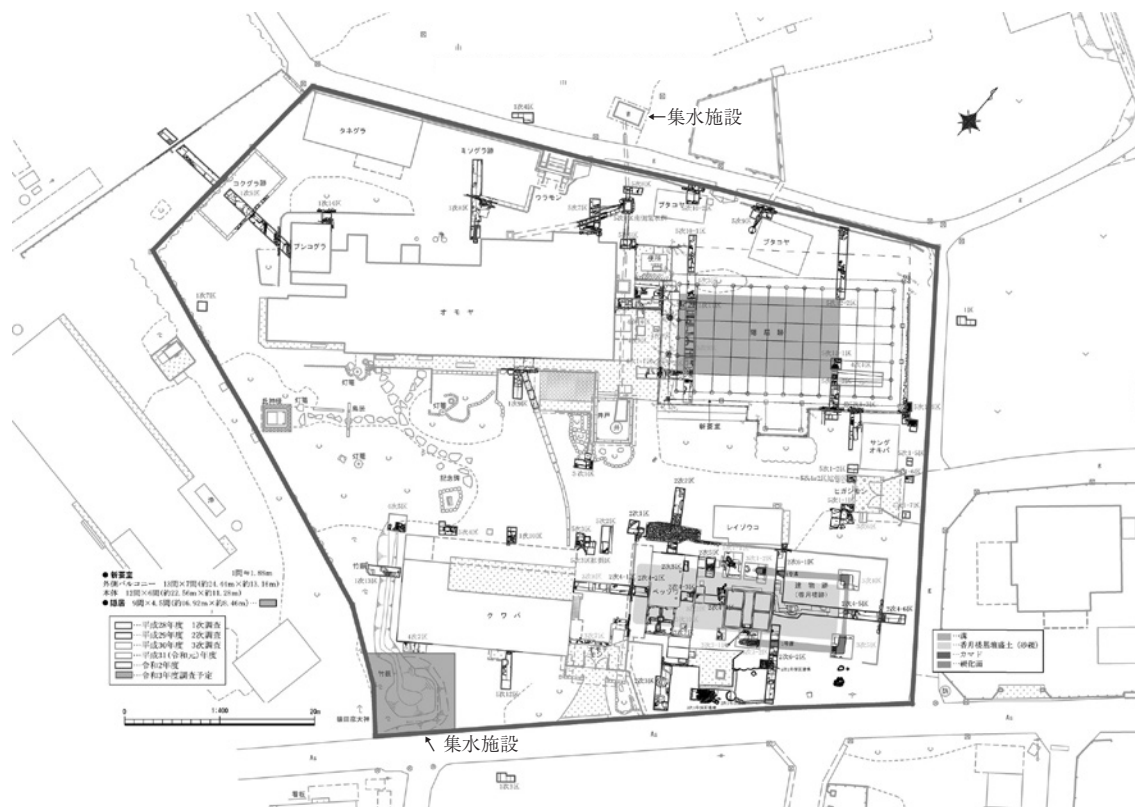


図7 年度別発掘調査平面図

層、その上には約50cmの耕作土が堆積しており、田高弥平旧宅を含む新地集落は、天明3年以降の洪水層の土壌の上に、文政5年以降集落が形成されたことが判明した。また主屋西側から北側にかけて微高地になっている部分は盛土と考えられていたが、自然堆積による微高地であることがわかった。主屋は微高地を背面にして建ち、微高地部分を造成した所には種蔵、味噌蔵、穀蔵を建てた。主屋と穀蔵の基礎の高低差は約1mある。主屋と文庫蔵の基礎は標高40.7mと同じ高さになっており、同時期の建築と考えられる。主屋玄関前の調査区では、主屋が建てられた当初の地表面は現在よりも約50cm下であったことが確認された。

史跡内の排水は、南北2ヶ所に掘られた集水施設に流すため排水管が埋設されている。北側の集水施設は裏門に近い史跡外に、南側は桑場の南西側に接した場所に掘られている。北側へ流す排水管について主屋東側で確認したところ、直径約40cmの土管を地面から70cmの深さに埋設していた。南側へ流す排水管は、桑場北側に桁行方向に沿って直径約30cmのヒューム管を埋設していた。またヒューム管に並行して緑色凝灰岩の石組を検出した。桑場西側は桑場の梁間方向に平行した溝状遺構が掘削されているだけで排水管は検出されなかった。溝状遺構は集水池までつながっている。

新蚕室基壇の西側で、表土から約80cmの深さのところ、カマド跡と考えられる焼土と灰を検出した。明治6年～7年頃に建てられた新蚕室は、表土上に礎石が残っているため、カマドは新蚕室建築以前に建っていた初代弥兵衛の「隠居」に伴うものと考えられる。

平成29年度の調査

別荘修復整備事業の実施設計に伴い、別荘の建つ香月楼基壇の地業や遺構の確認を中心に調査を行った。

香月楼基壇の使用変遷は以下の5つの時期があることが判明した。

- 1期（江戸時代末期:文政～安政以前）香月楼基壇造成以前
- 2期（江戸時代末期：安政以後）香月楼基壇造成

期・香月楼建築期

3期（明治初期）別荘建築期

4期（大正末期～昭和初期）香月楼床下の蚕種保護用冷蔵庫と別荘南側便所建築期

5期（昭和期）煉瓦遺構建築期

基壇は盛土造成により地面から約1m高くなっている。盛土の周囲は表面を平らに加工した浅間石の石積み⁽⁶⁾がめぐる。基壇には南北約6m、東西約21.5mの範囲で砂礫による盛土が行われていた。最初に砂質土で盛土造成後、約1mの深さを掘り込み、砂礫を入れていた。東側にいくにつれて掘り込みは浅くなり、西側とは逆に砂質土を盛って平坦に造成している。別荘内の調査区では、砂礫盛土の直上に別荘のものとは異なる礎石が設置されており、別荘建築以前の建物の存在が判明した。

別荘の南側は、陶器類、瓦、ガラス製品、蚕種製造に使用された道具類を廃棄した土坑、便所遺構2基を検出した。隣接する香月楼の南の井戸の周囲には、井戸に伴うコンクリート製の排水溝、沈砂研、土止めの遺構、煉瓦遺構2基を検出した。

香月楼の床下に建築された蚕種保護用の冷蔵庫は、砂礫盛土を掘り込んでコンクリートを設置しており香月楼基壇の中では一番新しい時期のものと考えられる⁽⁷⁾。

平成30年度の調査

別荘修復整備工事の電気設備埋設箇所の遺構確認と前年度に続き香月楼基壇の地業や遺構の確認、新蚕室基壇の新蚕室以前の建物の遺構確認を中心に調査を行った。

香月楼基壇の使用変遷は新たに検出された遺構を踏まえ、7時期を設定した。

- 1期（江戸時代末期：文政～安政以前）地山面を掘り込んで浅間石を設置
- 2期（江戸時代末期：文政～安政以前？）香月楼北側のカマド
- 3期（江戸時代末期～明治初期）砂礫層盛土に壊された土間面と浅間石
- 4期（江戸時代末期：安政期～明治初期）香月楼基壇の盛土造成、砂礫盛土、香月楼建築期
- 5期（明治初期）別荘の建築時期

6期（大正末期～昭和初期）香月楼床下の蚕種保護用冷蔵庫の設置、溝状遺構の掘り込み

7期（昭和期）煉瓦遺構建築期

香月楼基壇の溝状遺構は砂礫層盛土を南北と東側を囲み、コの字状にめぐる。深さ約150cm、幅は約70cmで、溝状遺構の端に行くに従い浅くなる。溝を掘削後、時間を置かずに埋め戻されており、覆土からはコンクリート片、鉄製品、釘、瓦、碇子片が出土した。これらの遺物の年代から、溝状遺構は大正時代末から昭和初期の段階と考えられる。

表門北側では主屋方向と別荘方向へ向かう踏み石を検出した。踏み石以外には香月楼基壇脇で土坑を検出した。

新蚕室基壇では、使用面を2面確認した。上面は1次調査で検出されたカマドに伴う土間面と、同時期の基壇跡を検出した。さらに下面でカマドを検出した。新蚕室基壇の地業として、地山面を掘り込み、長径約20～25cmの浅間石が上端をそろえて設置されている状況を検出した。

令和元年度の調査

文久3年家相図の改正図⁽⁸⁾には、主屋と新蚕室基壇の間に厩が描かれている。厩の規模と間取りは別荘と一致することから、厩を移築したものが別荘となった可能性も考えられる。そのため、主屋と新蚕室基壇の間にある通路部分の建物遺構の有無の確認、新蚕室基壇の遺構確認、桑場周囲の排水施設と遺構の確認を中心に調査を行った。

厩の可能性のある遺構について、遺構の有無の確認調査を行ったが、厩と確認できる遺構は検出されなかった。ただ、硬化面を2面検出したこと、厩があったと仮定した場合に建物の範囲だった部分の北側で、礎石の可能性のある角閃石安山岩を1点検出したことから、建物が全くなかったとは言いきれない。角閃石安山岩が設置されていた硬化面と上面の硬化面は同じレベルであり建物遺構の痕跡と捉えておきたい。

桑場周囲では排水施設の確認を行った。北西側の角で直径31cmのヒューム管が深さ約80cmに埋設されていた。ヒューム管は西側への延長はみられずこの場所で途切れていた。ヒューム管上には土管の破片

やコンクリート片が見られた。

新蚕室基壇では「隠居」の範囲を確認した。西側では前年度調査で検出された硬化面と基壇跡の傾斜、地山を掘り込み設置された浅間石の続きを検出した。東側は隠居の東端と想定される位置に調査区を設定した。調査区の西側では、浅間石割石を主体とした集石を検出した。新蚕室基壇の西側の調査区でも類似した遺構を検出しており隠居に関連した可能性もある。この集石より東側では遺構は検出されなかった。

令和2年度の調査

東門周囲の排水施設設置予定箇所の遺構確認⁽⁹⁾、史跡内の排水施設の状況確認、新蚕室基壇の遺構と石積みの確認を中心に調査を行った。

現在残る東門は、明治時代後期には現在の門と同様の形式になっている。昭和40年～50年代にかけて門の通路部分に土間コンクリートの敷設、門に接した生垣をブロック塀に変更するなどの改変は見られるが、門自体に大きな改変は見られない。令和3年度に修復整備工事を予定していることから、東門周囲の遺構確認を行った。東門の軒先の雨落ちにあたる部分で、直方体に加工した緑色凝灰岩を一列に据えている状況が検出された。この緑色凝灰岩は、門の桁行方向に沿って通路部分の約2.5mの範囲で直線状に設置されていた。門の外側では検出されなかった。

蚕具置場北東角では長径約15cmの扁平な川原石を敷き詰めた遺構を検出した。川原石の敷設された範囲は新蚕室基壇の南東角にかけてみられ、石敷きの上には球状の漆喰片、瓦片、陶磁器片、レンガ片などが堆積していた。新蚕室は明治6～7年頃に建築され、明治40年代には雨樋を設置している状況が古写真からわかる。雨樋からの雨水や新蚕室からの排水を基壇外へ流す直径5cm排水管（陶器製）が南東角付近の石積みに埋設されていることから、石敷きは基壇からの排水を処理する遺構と想定している。

今までの調査の中で検出された排水管は、土管とヒューム管が混在していた。桑場北側の排水管は集水桝に接続する部分では直径約40cmの土管を使用しているが、西側ではヒューム管を使用していた。井



図8 平成28年度調査 基本土層



図11 平成30年度調査 香月楼基壇溝状遺構と浅間石



図9 平成29年度調査 香月楼基壇南側の様子



図12 令和2年度調査 東門南側綠色凝灰岩検出状況



図10 平成29年度調査 香月楼基壇西側の砂礫盛土の掘り込み状況



図13 令和2年度調査 桑場北側集水桝（新旧）、土管、石組溝

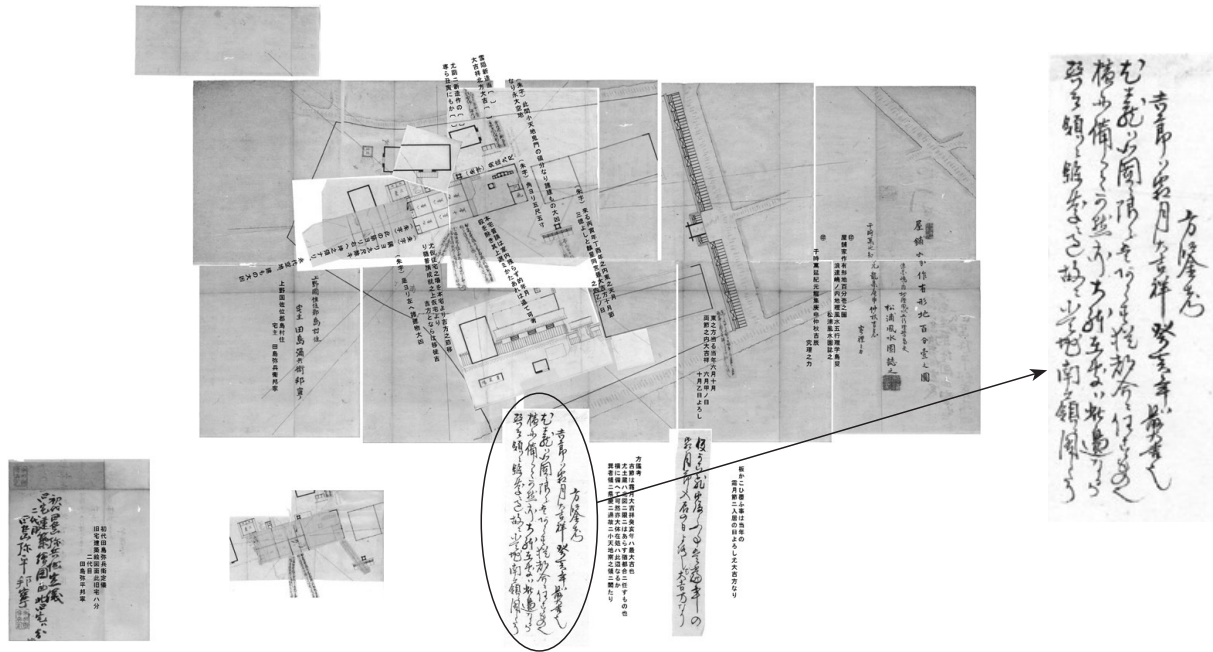


図14 万延元年家相図（改正図、付箋有）



図15 「香月楼」扁額



図17 田島弥平旧宅の主屋と井戸（明治時代か）



図16 田島弥平旧宅での葬儀の様子（明治時代）



図18 田島弥平旧宅の表門、別荘、香月楼（大正時代か）

戸から桑場に向かって埋設された排水管には直径約30cmのヒューム管を使用していた。主屋北側では直径約40cmの土管を使用していた。集水枡はコンクリート製のものが桑場北側と井戸南西角の2ヶ所に埋設されていた。主屋北側には浅間石切石を積んだ東西約80cm×南北約110cm、深さ約110cmの集水枡がある。主屋と井戸からの排水を集めるため、他の場所と比べて大型のものを設置し現在も使用中である。また桑場と別荘の間では約70cmの深さから直径10cmの釉薬をつけた陶器管を検出した。これは上水道管と考えられる⁽¹⁰⁾。

(2) 史資料調査

史資料調査は平成27年度から開始し継続して行っている。この調査を始める以前、神奈川県横浜市の横浜開港資料館により昭和54年度から調査が行われ、「田島弥平家所蔵文書」5,173点を目録化した。それらは『横浜関係史料所在目録第1集 群馬県その1』（昭和58年）、『横浜関係史料所在目録第3集 群馬県・長野県その2』（昭和62年）に収録されている。横浜開港資料館が調査した資料のうち第1集に収録されている目録は、平成22年度に伊勢崎市教育委員会で編年に並べ替えたものを復刻した。

平成28年度からは修復整備工事に向けた環境整備に伴い、主屋、文庫蔵、別荘、桑場、種蔵から搬出した文書類と養蚕道具の整理を行っている。令和元年度までに整理した文書・写真類は314箱11,089点にのぼる。その中でも興味深いものは、島村蚕種株式会社の一括資料と、種蔵から発見された「香月楼」と書かれた扁額⁽¹¹⁾、横浜開港資料館整理分の資料の中から判明した万延元年家相図である。

島村蚕種株式会社は昭和16年蚕糸業統制令により、企業の合理化と統制の便宜のため発足した責任保障島村蚕種共同施設組合を前身とし⁽¹²⁾、昭和22年に島村蚕種協同組合に改組し、昭和45年に島村蚕種株式会社と組織が変更され昭和63年に廃業した会社である。田島弥平旧宅には島村蚕種共同施設組合発足時から島村蚕種株式会社解散までの会社の経理や経営関係、蚕種製造関係、社員雇用関係等の1,000点以上の記録が残されていた。

田島弥平旧宅では、文久3年家相図⁽¹³⁾の存在は知られていたが、整理済の建物関係図面の中に文久3年以前の万延元年（1860）家相図があることが判明した。この家相図の右下には「屋舗家作有形地百分壺之圖／浪速嶋ノ内地理風水五行理学島叟／松浦風水園誌之／于時萬延紀元龍集庚申仲秋吉辰／究理の力」、左下には「上野国佐位郡島村住／宅主／田島弥兵衛邦寧」と書かれており、大阪島ノ内の松浦風水園が万延元年旧暦8月に作成した家相図で、依頼者は2代目弥平ということがわかる。文久3年家相図と同様、屋敷全体図と全体図に張重ねた部分図の2種があり、元図と改正図と考えられる。文久3年家相図との相違点は、改正図に建物を建てる位置や時期について「吉」「大凶」など鑑定が書かれた付箋が張られていることである。その中でも「方鑑考」と書かれた付箋には「吉節は霜月大吉祥癸亥は最大吉也」とあり、文久3年11月が大吉祥とされている。これは主屋の棟札に書かれた上棟年月と一致しており、弥平は主屋の新築と屋敷の整備に取り掛かるため、家相図の鑑定を大阪の松浦風水園に依頼したところ、主屋の改築の大吉祥は文久3年霜月との鑑定があったため、3年後の文久3年霜月に上棟を延期した。そして主屋は文久2年8月から建築に着手し、軸組完成直前の文久3年10月に家相図を作り、大吉祥である11月に上棟したのではないかと考えられる。今回の史資料調査の中では、明治31年2代目弥平の死去に伴い家督相続をする際の登記書類一式や大正13年（1924年）の建物届など建物の変遷がわかる史料が見つかり、今まで明らかにされていなかった建物変遷が追えるのではと考えている。

古写真も多数見つかった。主屋玄関跡の写真、2代目弥平の葬儀と考えられる写真、明治43年の利根川大洪水の被害状況の写真、大正時代の表門と香月楼、昭和初期の空撮写真、昭和33年に撮影された香月楼、島村蚕種株式会社での作業風景をまとめたアルバムなどがある。

3 普及・啓発活動の状況

田島弥平旧宅が国史跡に指定された平成24年度から主屋の特別公開や周辺の養蚕農家群散策など、地元「ぐんま島村蚕種の会」⁽¹⁴⁾の協力のもと普及活動を行ってきた。平成27年度からは5月と11月の年2回の普及公開事業を行っている。11月のイベントには、伊勢崎菊花同友会協力のもと菊花展の開催や埼玉県深谷市の渋沢栄一記念館とのスタンプラリーの開催なども行っている。平成28年度からはデジタルサイネージを設置し桑場1階の公開と、毎月第3日曜日には主屋1階上段の間の公開を開始した。平成30年9月からは旧境島小学校の一部をガイダンス施設「田島弥平旧宅案内所」として開館し、島村や田島弥平の業績の展示を行っている。

出版物としては、平成24年度～27年度にかけて『広報いせさき』に連載した、「田島弥平旧宅物語 紡いだ歴史」と「いせさき絹遺産を訪ねて」をまとめた『田島弥平旧宅物語』を平成29年度に発行した。

4 これまでの成果と今後の課題

世界遺産登録後、田島弥平旧宅では『整備基本計画』に基づいて整備事業と調査事業を行ってきた。

発掘調査では、田島弥平旧宅周辺の土地が天明3年以降の洪水で運ばれた土砂によって形成されたことが明らかになり、文久3年に主屋が建てられた当時の築造面やその後の生活面も徐々にわかってきている。幕末から明治時代にかけて建築された養蚕農家群は、洪水対策として建物を地表面よりも1mほど高くし、周囲を浅間石の石積みめぐらした基壇の上に建てているが、基壇を築く際の地業方法がわかってきた。新蚕室基壇と香月楼基壇では使用変遷にいくつかの時期があり、建物のあった位置も推定できるようになった。文久3年家相図以前にあった建物遺構が見つかった。敷地内に設置された上水道や排水設備の状況もわかってきた。

史資料調査では、古写真により明治時代から昭和初期にかけての建物の様子が明らかになった。万延

元年家相図により文久3年以前の建物配置がわかったこと、香月楼の扁額の発見により、梁川星巖が嘉永7年にその名を付けたことがわかったなどの発見があった。また島村蚕種株式会社の一括資料を整理したことにより、戦中から昭和の終わりまで続いた島村における蚕種製造業の最後の姿もわかってきた。

これらの調査成果から今後の整備事業についての課題も見えてきた。1つ目は史跡全体の排水計画ができていないことである。大雨が降った場合、庭と東門周辺に雨水が集中する。建物の土台部分が傷み、見学者の通路としても支障が出るため、地下の遺構に影響が出ない形で排水設備を整備する必要がある。2つ目は桑場の展示についてである。桑場は展示施設として活用する予定であるが、展示内容の検討が必要である。田島弥平旧宅案内所や近隣の大型養蚕農家でも展示が行われており、田島弥平家の特色を活かした展示が必要である。文書類や蚕種製造道具などが大量に残っているため、調査を早急に行い展示や建物の整備に活用できる形に整えることが必要である。3つ目は調査研究の遅れである。建物調査、建具調査、発掘調査、史資料調査など、田島弥平旧宅では史跡指定後も様々な調査を続けてきた。しかし最新の研究成果をまとめた報告書はいずれの分野でもまだ刊行されていない。史跡整備に必要な情報を整理して活用するためにも早急な対応が必要である。

おわりに

登録後5年間の整備状況や調査とその成果についてまとめてみた。田島弥平旧宅の場合、他の3資産とのいちばんの違いは、所有者が生活をしている場でもあることである。生活の場を守りつつ整備や調査を成り立たせることは、どちらにとっても様々な問題を生じる。しかし冒頭でも述べたように、田島弥平旧宅は「日本の近代化を語る上で他に類例がなく、欠くことのできない歴史的資産」である。この貴重な文化財を守ってきた人々への敬意を忘れず、今後も後世に確実に引継ぐために整備事業に取り組

んでいきたい。

うことを目的に、平成17年（2005）12月に設立された。

註

- (1) 境町史第3巻歴史編上P175.176
- (2) 青木宏「(2) 島村と利根川」『田島弥平旧宅調査報告書』（伊勢崎市教育委員会・平成23年）P6・7
- (3) 写真裏面には「飛行機上ヨリ撮影セル／桑柘園全／宮崎市太郎氏撮」とある。写真を撮影した「宮崎市太郎」は、7代目当主故田島健一氏の弟の田島秀男氏に聞き取り調査をしたところ、「熊谷の陸軍施設から飛行機に乗ってたびたび訪れた人」とのことである。熊谷の陸軍施設は正式名称を「熊谷陸軍飛行学校」といい昭和10年（1935年）に設置されている。
- (4) 境町『境町の民家と建造物』（1989）P76による。註2、3の内容から、空撮された桑柘園の写真は、昭和10年～12年頃の田島弥平旧宅であることが推測される。
- (5) 大野敏「田島健一家に見る大型養蚕農家屋敷の移り変わり」『田島弥平旧宅調査報告書』P48
- (6) 田島弥平旧宅には浅間石の石積みが隣地との境界、建物のある基壇の周りなどに施され、浅間石を多用している。これは田島弥平旧宅に限られたことではなく、島村地区に建てられた幕末～明治時代の建物に共通している。
- (7) 冷蔵庫は水を使用して冷やした鉄筋コンクリート製で、規模は東西約4.8m、南北約3.9m、コンクリート上端からの深さは約2.4mである。内部は中央に南北方向の通路を作り、それをはさんで南北に2部屋ずつ合計4部屋あった。各部屋床の四隅には水を流す溝があり、すべての水が南側の集水槽へ流れるよう傾斜させる構造であった。
- (8) 前掲註5による。
- (9) 東門周囲は、史跡内で標高がいちばん低い部分であり、軒樋も設置していないことから雨水がたまってしまう。そのため東門の柱は根が傷んでおり、排水溝を設置することになった。
- (10) 史跡内で検出された上水道管はいずれも直径約3cmの塩化ビニール管である。今回検出された管は埋設が深く、陶製であることから、設置された年代は古くなると考えられる。
- (11) 梁川星巖は幕末の漢詩人である。田島弥平旧宅の主屋には頼山陽による「遠山近水邨舎」の扁額が掲げられている。
- (12) 島村の全蚕種製造者44名により組織される。出資口数1,600口 出資金50,000円、爾来製造室、保護室、冷蔵庫（10馬力フロンガス直接冷却装置）、検査室を備えていた。社屋は旧境島小学校の南にあり、現在その跡地は住宅地となっている。住宅地の一角には島村の蚕種製造業を記念して「島村蚕種業績碑」が建てられている。
- (13) 前掲註5による。
- (14) 「ぐんま島村蚕種の会」は、蚕種業を中心として発展した島村の歴史を研究調査し、地域興しの一翼を担

参考文献

- 金子緯一郎『利根川と蚕の村』（上毛新聞、昭和54年）
境町史編さん委員会『境町史』歴史編上・下（群馬県史編さん委員会『群馬県史』通史編8（群馬県、平成元年）
伊勢崎市教育委員会『田島弥平旧宅調査報告書』（平成25年）
伊勢崎市歴史的建造物調査委員会『島村のたてもの』（平成23年）
群馬県蚕糸業史編纂委員会『群馬県蚕糸業史』下巻（昭和29年）